
夜勤明けの僕と、暇だというきみ

佐々岡洋介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜勤明けの僕と、暇だというきみ

【Nコード】

N4268H

【作者名】

佐々岡洋介

【あらすじ】

工場の夜勤のアルバイトで生活をする僕。そんな僕の前に現れたのは、幼いころをともした、きみだった――

第一話

通勤ラッシュの時間を一時間ばかり過ぎた住宅街の道路はやけに静かで、のんびりとした空気があたりを包み込んでいた。僕は駅に背を向けて、住宅街をゆっくりと歩く。疲労と眠気から来る倦怠感
は僕の体に泥のようにまとわりついて、速く家路についてベッドに
潜り込みたいと思う僕の思考とは裏腹に、体の動きをひどく鈍いも
のにしていた。

大きいとも小さいとも言えない一戸建ての家が肩を寄せ合うよう
に並んでいる、大体どの家も車一台分の駐車スペースとおまけ程度
の庭が付属していた。どの家も、デザインや色が違うのに、どれも
同じものように見えてくるのはなぜだろうか。そんな事を考えるけ
れど、今は思考よりも倦怠感が僕の体を支配しているようで、つま
く考えがまとまらない。たぶん、同じに見えるのではなく、実は全
く同じなのだろうというよくわからない結論に達した。

歩道のある少し大きな、この住宅街のメインストリートを左に曲
がる。普通車ならぎりぎり対向できるだろという細い道だ。相変わ
らず道の両脇にはどれも同じような住宅が並んでいる、その
左奥、クリーム色の壁に灰色の屋根、玄関の横に小さな庭と一台分
の駐車スペースがある。恐ろしいほどこの住宅街に馴染んだ家が見
えてきた。僕の家。いや違う、正確には僕の父が所有する家だ。

道路から三段ほどの短い階段を上がって、腰の高さほどの鉄で出
来た、柵のように、細い棒で組まれた門を押して玄関へと向かう、ふ
と庭に目をやると、干されたばかりであろう洗濯物が風にほのかに
なびいていた。僕の昨日着ていたTシャツと父の仕事着であるワ
イシャツが並んで、ゆらゆらと揺れている。それを見て、僕はため

息をつきながら洗濯物を干す母の姿を想像していた。父はあまり僕の事に関心がないのか、僕の生活について特に何かを言ったり、望んだりはしなかったが、母は違った。物干しに並ぶ洗濯物はティシヤツではなく、ワイシャツであってほしかったと母は望んでいたのだ。

大学を出て、25歳になっても未だに定職につかず、工場の夜勤のアルバイトで生計を立てるような生活を母は望んではいなかった。いや、僕だってそんなものは望んではない。では誰が望んだのか？誰も望んではない。ではなぜそうなったのか？それは、間違はなく僕に責任がある。でも、僕はなぜ、フリーターという道を選んだのか。

洗濯物を見ながら、ぼんやりと考え込んでしまっていた。夜勤終りの疲労したときは、まともにも考えもまとまらないのに、よく、取りとめのない事を考えてしまう事があった。今のはまさにそれだった。思考の渦を取り払って、玄関のノブに手をかけた。すると、

「秋吉くん！」

頭の、奥のほうで声が聞こえた。母の声とはあきらかに違う、若い女性の声だった。ひどく懐かしさを感じる声で、驚くほど、自然に頭の中に流れ込んできた。ありえない、幻聴ではないのかと思いつながら、声のしたほうに顔を向ける、ちょうど、玄関を前にした僕の真後ろから聞こえてきていた。顔を向けて、次に体をそちら側に向ける。

「久遠寺……」

僕は思わず呟いていた。

僕の住んでいる家のちょうど正面、どちらかといえば和風な佇まい、それでもやはりよくある一戸建ての家で、一台分の駐車スペースと小さな庭がある、ごく普通の一軒家。なぜか、門だけはうちと同じような、洋風の鉄格子のような門がついているが、それほど、アンバランスに思えないのが不思議だった。

そんな門に手を置いて、久遠寺綾乃は笑顔でこちらを見ていた。彼女と最後に会ったのはいつだろうか。中学の卒業式？いや、たぶん、それは最後ではない。ではいつだろう。そもそも、最初にあつたのはいつのことだったか。

夜勤明けの疲れた頭で、僕はとりとめのない事を考えていた。

第二話

手をおいていた門をそつと内側へと畳んで、すつと門を抜ける。3段ほどの短い階段を下りて久遠寺家と我が家を隔てている狭い道を小走りで横断して、我が家の入り口である小さな階段の前で止まった。階段を上がって門を開けようとする様子はない。

僕は久遠寺の行動をぼんやりと眺めていて、久遠寺が家の前まで来てようやく、僕は玄関から離れて、久遠寺の元へ向かった。向かったとつても、門の内側までで、久遠寺とはまだ、門と階段3段分の隔たりがあった。久遠寺を見下ろすようなかたちになり、久遠寺は当然、階段の下から僕を見上げる格好になっていた。

ロングヘアで、前髪は中央で分けられていて、そのまま、耳の後ろと肩の上を経由して、胸のほうへと延びていて、ひたいが髪に隠れることなく出ている。真っ白な、ブラウスのようなカットソーは細身のポートネットクにレースの袖をあしらっている。割りかしゆつたりめの、色の薄いジーンズに、手首には革製のバンゲルをつけている。そのバンゲルをつけた手には、少し大きめで、口の大きなストローバッグを持っている。全体的に、カジュアル過ぎず、かと言って、気合いを入れておしゃべりしていませんという感じでもない、自然に衣服を着こなしているように見えた。素直に、似合っていると僕は思った。

それに引き換え、僕は穿き古したジーパンに、なんだかよくわからない英単語が書きなぐられた安物のティシャツ。どうひいき目に見たって、服装に気を使っているようには見えない。まあ実際に服装には気を使っていないのだから仕方ない。それに仕事帰りなのだからまた仕方ない。だれも、工場の夜勤に行くのに服装を気にする

奴なんていない。僕も普段着であれば、今よりかは幾分マシな格好をすると、なぜか、自分の中で弁解していた。

数瞬、沈黙があつて、その沈黙は久遠寺が破った。

「久し、ぶりだね。いつ以来だろう。元気、してた？」

僕の反応をうかがうように、ところどころ、間をあけて話していた。久遠寺はいつも周りの人間に気をつかうような性格だった事を思い出した。今もその性格は変わってはいないのだろうか。

「ああ、うん。別段、病気とかはしてないな」

いつ以来という所は答えなかった。自分でもはつきりと覚えていなかったからだ。たぶん、まともに話したのは中学の卒業式の日以来だ。

「そつか……」

会話が途切れる。久し振りの会話のせいか、それ以外の要因があるのか、他人行儀で、どこかよそよそしい雰囲気の流れていた。でも、それは仕方ない。十年以上もまともに話もしていない相手なんて、たとえそれが友人同士だったとしても、そんなのは見ず知らずの他人と言つても差支えない。たぶん、一般的にはそつだ。そうして、少し間が空いてから久遠寺は続けた。

「あのね、今、仕事帰りなんだよね？」

「そうだけど、なんで知ってるんだ？」

仕事という言い方にふと疑問を抱いた。アルバイトははたして、仕事と言えるのだろうか。卑下するわけではなく、純粹にそう疑問に思えた。

「昨日の夜にね、帰ってきたんだけど、その時たまたまおばさんに会って、それで秋吉くん、今日は夜勤で、帰ってくるのは朝の10時ごろだって教えてもらったんだ」

なるほどと思った。仕事という言い回しは母から伝え聞いたせいだったのかと納得した。母は、僕のアルバイトの事を決してアルバイトとは言わなかった。学生の頃に行っていたアルバイトは普通にアルバイトと言っていたので、たぶん、母にも思うところがあつたのだろう。妙なところに納得していると、久遠寺は続けて、意外な提案をしてきた。

「それでね、仕事帰りで悪いんだけどね。今から、少し、お茶に付き合ってくれないかな？やること無くて暇なんだよ」

久しぶりに実家に帰ってきて、暇という事はないだろうと思った。しかし、それは彼女なりに気を使った発言である事にも気がついていった。

「ああ、いいよ」

そう言って僕は門を開けて、短い階段を下りた。僕と久遠寺を隔てるものは無くなっていた。すぐ近くで見る久遠寺は僕が記憶していたよりも、いや想像していたよりも、と言った方がいいかもしれないけれど、ずっと小柄だった。改めて、僕は、彼女とすごした日々から、短くはない年月が経過したのだという事を実感した。

夜勤明けの、先ほどまで体にまとわりついていた眠気はいつの間にか四散していて、残るのは単純な体の疲労だけだった。僕と久遠寺は、並んで、先ほどまで僕が歩いていた道を二人して歩きだした。

ふと、僕は昔の事を思い出す。

第三話

朝、母はいつも時間がないといいながら、忙しく家事に追われていた。そうして、家事がひと段落ついて、登園の時間が近づいてくると、またしても忙しく化粧台へと向かい、せっせと化粧に励んでいた。僕はもうすでに、準備が出来ていて、鏡に映る自分と睨めっこをしている母の後ろで、「まだー？」と声をかける。そうすると、決まって「あともーちよつと！先に玄関に出てて」という返事が返ってくる。その返事を聞くと、僕は待っていました！と言わんばかりに廊下を走って、下駄箱の横にぶら下がっている通園用の黄色い帽子を取って、しっかりとかぶり、お気に入りのヒーローがプリントしてある紐のいらぬ靴をせっせと履いて家を飛び出す。自分の背よりも少し高い門を引いて階段を下りると、いつもそこには彼女がいた。

同じ帽子に同じかばん、同じ幼稚園の制服で、違うのはスカートかズボンかというくらい。長い髪を後ろで一つに束ねて、帽子の下から、尻尾のように垂れているのが印象的だった。

「行こうー！」

「うん！」

互いに挨拶をした後で、僕が手を差し出して、言って、彼女が僕の手を取って、答える。普通車がなんとか対向出来るくらいの細い路地だったけれど、幼稚園に通っていた頃の僕は、家の前の路地が細いなんて考えもなかった。久遠寺、当時はあやのちゃんと呼んでいたけれど、彼女と手をつなぎ、家の前の路地を歩く。しばらくして、大きな道へと交わる。この住宅地のちょうど真ん中を走る、

歩道もあって、バスなんかも通っている道だ。

その大きな道の前まで来て二人で止まる。子供だけで外に出ていいのは、家の前の道と、その路地と大通りが交差する所にある、ちよūd、僕の家の並び側にある小さな公園までだった。何気ない会話をしていると、母とおばさんが並んで後ろからやってくる。そうして、僕たちは家の前道から出ることが出来て、幼稚園までの道を二人、手をつないで歩いた。

どんな事を話したとか、あの日に何があった。なんて事はほとんど覚えてはいなかった。何せ、幼稚園の頃の事だ。覚えていたのは、二人でならんで通園したという大まかな事くらいだった。

過去を振り返りながら僕は久遠寺の横を歩く、昔はなんとも思わなかったこの路地も、今は細く狭い、見慣れた路地になっていた。幼稚園の頃、手をつないで歩いた道を、20年後、同じように歩いているというのがすこし不思議な感覚だった。でも、同じようにと言っても、もちろん手をつないでいる訳ではない。並んでいても微妙に距離が離れているし、たのしく会話をしている訳でもなかった。僕たちは特にこれと言った会話もないまま歩いて、一分もしないうちに大通りへと出た。

すると、久遠寺が急に歩みを止めた。ちよūd、僕と久遠寺の二人が外に出てよいと親に言われていたギリギリの所だった。

「駅前のスタバに行こうと思ってるんだけど、いいかな？」

「えっ？ああ、うん。大丈夫」

なんとなく、僕は久遠寺が思い出に浸ってそこで立ち止ったのではないかと思っていたので、少し意表をつかれた。考えてみれば、そんなことになるはずはなかった。

僕たちは大通りに出て、駅へと向かった。相変わらず人影は見えず、薄く張った雲の切れ間からは暖かな日差しが差し込んで、穏やかな陽気に街は包まれていた。鳥のさえずりが聞こえる。自動車の行き交う音が聞こえる。久遠寺の声は聞こえない。僕たちは黙って駅へと歩みを進める。

しばらくして、信号のある交差点へとさしかかった。赤信号に捕まり、歩みを止める。一台車が通り過ぎてからは、僕たちの前に車が通る事はなかった。別に信号を無視して先に進んでもよかったけれど、久遠寺にその意思が無いようなので、僕も信号が青になるのを待つことにした。

カランカランと鐘の音が聞こえた。ちょうど僕たちの右手側、交差点を対角線上に挟んだ角の、『コックル』というパン屋から人が出てきたようだった。なんとなく、そちらに目を向ける。昔からある、パン屋で、今でもたまに、バイト帰りなどに寄ることのある店だ。

気づくと久遠寺もパン屋を眺めていた。

信号が青になり、僕たちは歩みを進める。そういえば、あのパン屋にも、二人で行ったことがあったなどと、横断歩道を歩きながらふと思い出した。あれは、たぶん小学校の5年か6年生の頃だったように思う。はっきりとは思いつけない。久遠寺に尋ねてみてもよかったが、そうはしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268h/>

夜勤明けの僕と、暇だというきみ

2010年10月16日00時22分発行